恋愛
お題ったー

小高まあな

「深夜の映画館」で登場人物が「開き直る」、「ビニール傘」

　何も台風の日ではなくても良かったのに。
　人気映画のレイトショー。
　確かに楽しみにしていたけれども、傘壊れたし、高かったのに。
　彼がちらちら私の顔色をうかがっている。
　怒っていてもしょうがないか。彼の手を握る。諦めてビニール傘を買って、ここから近い彼の家に泊めてもらおう

「昼の遊園地」で登場人物が「開き直る」、「チョコレート」

「乗りたいんでしょ？　開き直るのはどう？」
とカレが言う。
「この年で昼間は恥ずかしい！」
「暗かったらいいの？　卑猥ー」
「違う！」
「しょうがないな、じゃあ次は三人で来ようね」
「三人？」
「僕たちの子供と。それならいいでしょ？」
　そういってチョコレート色した回転木馬を指さした。

「昼の遊園地」で登場人物が「再会する」、「ペットボトル」

「次あれ！」
　娘がいつになくはしゃいでいる。
　走った娘のリュックからペットボトルが落ちた。近くの人が拾ってくれる。
「すみません」
　顔をみて驚く。
「久しぶり」
　彼は笑う。
　お互い子連れで苦笑い。
　そして、どちらともなく首を横に。お互い片親だ。
「あのさ、約束のチョコレート色の回転木馬、一緒に乗る？」

　手品みたいだ。
　鏡の前で彼女のまつげがのびていく。顔が違う。
　体を動かし、シーツの冷たい部分を探す。
「あのさー」
　鏡越しに目が合う。
「別れようか？」
「え、今？」
「私、もう行くから、合鍵ポストにいれといてね」
　そして彼女はじゃあね、と出て行った。
　鍵のかかる音が響いた。

「深夜のプラネタリウム」で登場人物が「決める」、「アイス」

もう、ここには来られないのね、と彼女が呟く。
最初にデートしたプラネタリウム、０時丁度の上映をもって閉館だ。
あの日食べたアイスの味をまだ覚えている。
覚悟を決めて告げる。
「終わるまでに決めて欲しい。東北に転勤になるんだけど、一緒に来てくれないか？　星が綺麗な場所だよ」

「深夜の路地裏」で登場人物が「落ちる」、「すいか」

　暗いから見えなかった。
　がさごそと抜け出す。よく見えないけど痛い、怪我してる。
「誰！？」
　頭上から誰何の声。
「怪しい者じゃないです、溝に落ちちゃって」
　横の古いアパート、二階の住人。綺麗な声。
「暗いから。怪我してませんか？　良かったら手当しましょうか？」
　別の意味で落ちた。

「深夜のコンビニ」で登場人物が「溺れる」、「花火」

コンビニにも花火って売ってるんだ。
大学の時、海辺で花火したっけ。皆元気かな。当時のカレは、はしゃぎすぎて溺れてたよな。
ついつい花火も買ってしまった。残業終わり、夜食と一緒に。
「あれ、ユリ？」
後ろから聞こえた声、よく知っている声に思わず固まった。
低くて溺れそうな声。
一つ息を吸った。

「朝の駅」で登場人物が「嫉妬する」、「指輪」

　寝坊した！
　髪はひっつめに、薄いメイク、安いスーツで走る。定期を改札に叩き付けて、階段をかけあがる。電車に体を押し込める。
「久しぶり」
　横から声を掛けられる。花の香り。綺麗な化粧に質のいいワンピース。左手の指輪。
「結婚するの」
　学生時代、私から男を取った女が笑った。

「深夜の歩道橋」で登場人物が「嘘をつく」、「花火」

　大きな音がする。
「何の音？」
　彼女が言う。花火だよ、と答える。大丈夫、行こうと彼女の手を握り、歩き出す。
「階段気をつけて」
　暗闇だけど、彼女の白い肌は見える。
「煙くない？」
　花火、と答える。
　僕は左手に君を、右手に拳銃を。追っ手から逃げる。
　君の目に、僕はなるよ。

「昼の公園」で登場人物が「密会する」、「星座」

　会いたくて会えなくて忙しくて、ようやく時間がとれたのはお昼の30分。
　こんなに暑いのにねーなんていいながら、お弁当を公園のベンチで食べる。
　食後のデザート、顔見知りのお弁当屋さんからもらった金平糖。勢い余って袋からこぼれ落ちた。
「星座みたいだね」
　夏の大三角形。

「夜の廃墟」で登場人物が「抱きしめる」、「シャンプー」

廃墟マニアだもんね、と笑う。
でも、さすがに夜は暗いね。よくここで肝試しをしたよね。
髪を撫でて、そっと抱きしめる。いつもシャンプーの匂いがして、それが好きだった。
でも、今日はしない。
もう、しない。
「さよなら」
君にはもう会えない。
生きてる君にはもう会えない。

「夜のソファ」で登場人物が「思い出す」、「花」

「ね、思い出したんだけど」
　お風呂上がり、ソファーに座って雑誌を読んでいた彼女が言った。
「花は？」
「は？　ごめん、何のこと？」
「だから、私の誕生日の 時に遅刻してきて、花束で手を打つって言ったら、今花束渡しても邪魔になるからって……あー、ごめん元カレだ」
「アホっ！」

「朝の階段」で登場人物が「見つめる」、「桃」

　光が差し込んでキラキラしている。
「綺麗ねー」
　階段に腰掛けて、彼女が呟いた。
　一晩中水が出しっ放しで、一階は湖となっている。
「よし、片付けに貢献した方が今日夕飯奢ってもらえるのね」
　言い切ると立ち上がる彼女。その桃色の頬を見つめる。
　そういう前向きさ嫌いじゃないよ。

「朝のエレベーター」で登場人物が「約束を破る」、「ペットボトル」

「約 束したのに」

彼は顔を背ける。

何も朝一でそんなこと言わなくてもいいのに。

ずっと一緒に居ようね、を無邪気に信じていたわけではないけど。

彼がエレベー ターに乗り込む。持っていたペットボトルを投げつけた。

閉まる直前、運良く隙間から中に入り込み、鈍い音がした。ざまぁみろ

「昼のプラネタリウム」で登場人物が「開き直る」、「眼鏡」

ヤバい、眼鏡を忘れた。
イマイチぼけて個々の星がわからない。
ちらりと横目で隣を見ると、彼女はうっすらと口を開けて天井に見入っていた。
ナレーションが星の説明をしてくれる。見えない仕方ない。声から想像する。
お昼直後の眠気が襲う。

眼を開けたら彼女が怒ってたっていた。ヤバイ、寝た。

「深夜のコンビニ」で登場人物が「見上げる」、「コーラ」

炭酸の抜けたコーラみたい。ただ、甘いだけの関係。それも体に悪そうな、科学的な味。
話を切り出せないまま、コンビニの前、縁石に座って空を見上げる。暗い。
彼は一人で喋り続けている。
刺激の無い、炭酸の抜けた毎日。今日という今日は終わらせよう。

彼は言った。
「結婚しない？」

「早朝の車内」で登場人物が「なぐさめる」、「裸」

　ラッシュの前、まだ割と人が少ない電車内。
　女の子が泣いているのを男の子が必死に慰めている。それを寝起きの頭でぼんやりと聞いていた。
「彼女と別れるから」
　男の子が必死に言う。
　聞いた事がある声。
　まだコンタクトをつけてない。裸眼じゃよく見えない。眼鏡を出す。
　私の恋人だった。

「深夜の歩道橋」で登場人物が「疑う」、「花束」

　ちょっといいかな？　こんな夜遅くに花束なんかもってどうしたの？　というか、なんで靴を脱いで揃えてるの？　恋人にふられた？　だからって歩道橋から飛び降りるのはどうだろう。
　死ぬ事無いよ。話ぐらい聞くよ。
　職質っぽい？　ああ、非番のお巡りさんだから。非番のね。

　何よ？　女で悪い？

「朝の病院」で登場人物が「キスをする」、「ペットボトル」

「ペットボトルってリサイクルされるの」
　細い手でペットボトルを包む様に持つ。
「私も生まれ変われたらいいな」
　ペットボトルに朝日が光る。
「ねえ、キスして。そしたら頑張れるかも」
　潤んだ瞳の彼女からペットボトルを取り上げ、一口。
「間接キス。予防接種でうだうだ言うな子どもか」

「夜のファミレス」で登場人物が「予想する」、「犬」

「私、 予知が出来るの」
　終電を逃したファミレスで恋人未満の彼女が微笑む。
「疑ってるでしょー。そうね、今から五分後にチワワが通る」
　半信半疑だけど外を二人で見る。犬を連れた男性が通り過ぎた。すげー。
「次の予想。貴方、本当は家がこの近くなんでしょ？　遊びに行ってもいい？」

「朝のベッド」で登場人物が「見つめる」、「月」

　目が覚めた。
　ぼやけた視界に彼女の背中。外は少しだけ明るい。そーっと手を伸ばしてケータイを取る。午前五時。早い。
　彼女は机に座って、僕に背を向けて、本を読んでいる。早起きの彼女らしい。
　真剣な背中をじっと見つめる。
　気配を感じたのか、彼女が振り返った。
「おはよう、月」

「昼の教室」で登場人物が「泣き出す」、「水」

昼休み。お弁当を食べたり騒いだり予習をしたり、皆が思い思い過ごしている。
私は友達に「眠いから先生来たら起こして」と告げて机の上に突っ伏した。
目を閉じる。腕が水で濡れる。
何でも無いよ、たいした事じゃない。だから誰も気がつかないで。
昨日フられた、ただそれだけのこと。

「昼の駅」で登場人物が「怖くなる」、「足音」

　この時間は閑散としている。
　ベンチに座って電車を待つ。
　仕事をやめてしまった。セクハラする彼奴が悪かったのに。負けた自分が許せない。生活費どうするんだろう。不安でたまらない。
　足音が近づいてくる。
「永久就職してから再就職したら？」
　仕事を抜け出した汗だくの彼が言った。

「朝のキッチン」で登場人物が「くすぐる」、「ビニール傘」

　鼻腔をパンの焼ける香ばしい匂いがくすぐる。コーヒーの香りもする。かちゃかちゃと食器の音。
　窓から光が差し込んでる。今日は晴れたのか。
　昨日使ったビニール傘を干さないと。
　もうすぐ彼女が起こしてくれる。僕を呼ぶ声。
　ほらね。
　起き上がってキッチンへ。
「おはよう」
　彼女が笑った。

「早朝の屋上」で登場人物が「逃げる」、「花火」

「こんな朝早くになに？　まだ暗いじゃん」
　彼女の言葉を聞きながら、僕は準備を続ける。火をつける。
　大きな音と共に花火があがる。
　花火の下でプロポーズするという先祖代々に伝わるジンクス。花火大会は仕事だったから、今。
　彼女が頷く。
　さて、次は怒られる前に逃げるか！

「朝のプラネタリウム」で登場人物が「開く」、「雷」

　職場のドアを開ける。いつもと同じ一番乗り。
　小さなプラネタリウム。私の仕事場だ。
　私だけの場所っていう気がしてこの時間は好き。
　でも、
「おはよー」
　眠そうな声に笑いながら振り返る。
　雷に打たれたような寝癖の髪型。私の上司。
「おはようございます」
　彼が来てからも好きだ。

「昼の教室」で登場人物が「開き直る」、「靴」

お腹一杯。日差しは心地よい。目蓋が重い。
前の席の彼は完全に机につっぷして寝ている。あそこまで開き直れると幸せだろうな。
かかとを潰した上履きを脱いで、派手な靴下が見える。今日は赤。
眠いけど寝てはいけない。
きっとノートを見せてと頼まれるから。綺麗なノートを見せたい。

「夕方の階段」で登場人物が「感じる」、「噂」

　窓から入ってくる風に秋の空気を感じる。
　階段の隅で動けない。影に隠れる様にして。早く部活に行きたいのに。
　噂だからと気にしない様にしていたのに、本当だったなんて。大体、学校でいちゃつかないでよ。
　踊り場で抱き合う二人。
　付き合ってるなんて嘘だって信じてたのに。

「早朝のホテル」で登場人物が「思い出す」、「雷」

旅行に来ると朝早く起きてしまうタイプだ。今日だって例外じゃない。
高校の修学旅行ではベランダで外を見ていた。
下の階から雷に似た音がして覗き込むと、クラスの男子が煙草を吸っていた。内緒ね、と笑う。たてつけの悪い扉を開けた音。
新婚旅行に思い出す。今日はまだ起きない彼。

「夕方の遊歩道」で登場人物が「裏切る」、「冠」

　音楽が鳴ったら帰って来なさい、とママに言われていた。幼なじみの貴方と二人、手を繋いで歩いた、あの遊歩道はもうない。
　貴方はお花の冠を作ってくれた。大人になったら結婚してね、と。
　貴方を裏切るわけじゃない。私の気持ちを裏切るだけ。
　もうすぐ私、結婚します。

「早朝のコンビニ」で登場人物が「くすぐる」、「足音」

　カツカツと甲高い足音、いつもの客。彼女が来るとバイトも終わりか、と思う。毎日時間きっかりにやってくる、スーツをばっちり着こなした美人。
　今日も綺麗だな。
　レジにやってくる。いい香りが鼻腔をくすぐる。
　おつりを渡す瞬間気づいた。左手の薬指の指輪。昨日まではなかったのに。

「夕方の橋」で登場人物が「泣きじゃくる」、「鍵」

赤い。
夕日に染まって頬が赤い。小柄な女の子どうしたの？
鍵を落としてしまったの。
頬が濡れている。そんなに泣かないで。どこに落としたの？
川の中に落としてしまったの。彼の心の鍵を落としてしまったの。
泣きじゃくる彼女。橋からそっと下をのぞく。人型のものが浮いていた。

「深夜の神社」で登場人物が「選ぶ」、「鍵」

これが人生の分岐点だ。肝心要だ。どちらを選ぶか、それが鍵だ。
暗いし、怖いし、なんかもう泣きたいぐらいだけれども。
お百度参りなのか、丑の刻参りなのか、もはや自分でもわからない。
寒い。
ああ、神様。どうか彼が、私を選んでくれます様に。
執念は怨念に近い。私を見てよ。

「昼のプール」で登場人物が「噛み付く」、「鳥」

　私が一体何をしたのか。なんであいつはこうも、私に噛み付いてくるのか。
　プールサイドに這い上がりながら、睨みつける。
「なんで飛び込みしようとすると突き落とすわけ！？」
「なんで毎回ひっかかんだよ、この鳥頭！」
　むかつく。
　中２の夏休み、毎日顔を合わせる部活仲間。大嫌いっ！

「夕方の階段」で登場人物が「感じる」、「花火」

花火みたいな恋だった。
熱くどーんと盛上がって、花を咲かせて、さっと消えて行った。
始まりの時から、すぐに終わりそうな空気を感じなかったわけじゃない。
日差しが目にしみる。感傷的なのは夕方だからよ。きっとそれだけ。
踊り場に蝉が倒れている。夏の恋の終わりを感じた。

「夕方の遊園地」で登場人物が「逃げる」、「メール」

ゆっくりと、地面が遠ざかっていく。観覧車。
ゆっくりゆっくり。
一周どれぐらいかかるんだっけ？
夕日が綺麗だ。窓に張り付く様にしてそれを見る。
ケータイが震える。彼からのメール。気づかないふりを。現実逃避。
もうすぐきっと別れ話。
このまま止まってしまえばいいのに。

「夜の庭」で登場人物が「見つめる」、「犬」

　縁側に座って晩酌するのが好きだ。庭のハナミズキを見つめながら、父からくすねてきた日本酒を飲む。
　わん、と鳴き声。一匹の犬が迷い込んできた。
「呑む？」
　聞いてみるが、木の下で警戒する顔。
　その顔と、つぶらな瞳と、黒い毛並みが三日前に別れた恋人に似ていて、少し寂しくなった。

「夕方の遊歩道」で登場人物が「抱き合う」、「メール」

歩道橋をのぼりながら「バイト終わった」と彼氏にメール。
前を見ると二つの影が抱き合っていた。こんな時間からバカップルかよ。小さく舌打ち。
小柄な影が崩れる。背の高い方が振り返る。
「俺をフるからいけないんだ」
空と同じ、赤い色した刃物が右手に。
ケータイが震えた。

「昼の海辺」で登場人物が「耽る」、「コーヒー」

冬の海はやっぱり寒い。温かい缶コーヒーを抱えながら、水面を見つめる。
暇さえあれば僕はここで海を見ている。
夏に溺れた僕を助けてくれた、あの子がまた現れるんじゃないかと思っている。
会いたい。
彼女のあの優雅な泳ぎ方。忘れられない。
下半身魚だったけど、そんなこと関係ないんだ。

「早朝の駅」で登場人物が「選ぶ」、「足音」

どちらにしよう。
自販機の前で腕組み。紅茶もいいが、ココアもいい。
まだ人の少ない駅のホーム、きつい香水の匂いが高い足音と一緒に横を抜ける。
こうなったら同時押し。
出て来たのはお茶だった。何故。
しぶしぶお茶を飲む。
第三の選択肢というのもありか。二股やめて、別の人探すか。

「昼のグラウンド」で登場人物が「夢中になる」、「足音」

　昼休み、本を読むふりをしながら、グラウンドの方を眺める。
　上着を脱ぎ捨てて、Yシャツの袖を巻くって。はしゃぐクラスメイト。足元でまう砂埃。どろだらけなのに気にしていないよう。
　彼がゴールを決めた。嬉しそうな顔。可愛い。
　もうすぐ、教室へ戻ってくる大勢の足音が聞こえる。

「深夜のレストラン」で登場人物が「さよならを言う」、「眼鏡」

「いらっしゃいませー」
　深夜シフトでバイト中。来店のカップルはなんだか暗かった。男性の眼鏡が曇っている。
　席に案内すると「珈琲」の一言。ドリンクバーなんだけどな。
　でも何だろ？　修羅場？
　わくわくしていると
「あがっていいよー」
　店長の声。
「……お先です」
「うん、さよならー」

「夜の海辺」で登場人物が「ひっぱたく」、「指輪」

　ごつい指輪のついた手でひっぱたくのは犯罪じゃないだろうか。
　そう言ったら
「ひっぱたいた段階で暴行罪なんじゃないの？」
　とあっさりと言われた。
「ま、ナンパした方が悪いわね」
　黒い海を見ながらあいつは微笑む。
「好みだったんだよ」
「はいはい」

「ね、そろそろ私にしたら？」

「深夜のホテル」で登場人物が「愛される」、「靴」

ハイヒールの靴をはいた足が彼の肩越しに見える。
今ここには彼しかいない。そういうことになっている。
彼はとっても優しいし、私を愛してくれているけれども、私はここにいないことになっている。
誰にも言えない内緒の恋、古いホテルでの不条理な密会。
愛されているのか不安になる。

「夜の路地裏」で登場人物が「告白する」、「傘」

　好きだった。一目見た時から好きだった。
　黒い空から冷たい雨粒。貴方の頬を濡らしている。まるで涙みたい。
　耐えられなかった。そんな貴方はもう見たくなかった。
　貴方に傘を差し出す。
「うちに来たら？　一緒に暮らそう」
　そうして貴方を抱きしめる。

　私が白い毛皮を綺麗にしてあげる。

「朝の廃墟」で登場人物が「約束する」、「猫」

もう朝が来ちゃったね。
仕事に行かなくちゃ。
そんな顔しないで、夜にはまた来るわ。
貴方の気まぐれな猫みたいなところ好きだけど、私から離れるなんて許されないの。
こんな場所には誰も来ないだろうけど、首輪で繋いだし逃げないでね。
犬になるなら離してあげる。
約束できる？

「深夜の歩道橋」で登場人物が「見上げる」、「雨」

黒い空から雨粒が落ちてくる。
家を飛び出したのはいいけど、後の事を何も考えてなかった。ため息。
階段をのぼる音。近づいてくる足音。
雨が落ちてこなくなる。
顔をあげる。
「風邪引くぞ、ばか」
仏頂面をした彼。
「ほら、いいから帰るぞ」
差し出された右手に仕方なく自分の手を重ねた。

「朝のベッド」で登場人物が「約束する」、「月」

　月がもうすぐ消える時間。
　そろそろと彼は体を起こした。その手を掴む。彼は困ったような顔で笑う。
「帰らないと」
「また来てね、すぐ来てね」
「うん」
　約束、と小指を絡ませた。
　一人の部屋で、まだ少しあたたかいベッドに頬を押し付ける。彼は帰ってしまった、家族のところに。

「夜のプラネタリウム」で登場人物が「抱き合う」、「メール」

ドームの中には満天の星。
もうすぐ朝がやってきて、太陽が昇る。
彼の頭を抱き寄せると、背中にそっと手を回された。
携帯電話が鳴り、終わりを告げる無慈悲な メール。
人工の星座の下、プログラムの貴方と抱き合う。偽物だけの思い出プラネタリウム。嫌な商売。
それでも通う、私が居る

「昼の河川敷」で登場人物が「泣き出す」、「紫陽花」

　綺麗だけど冷淡だ。
　好きな男からそう言われても、彼女は表情を崩さない。

　その彼女が今、橋の下、紫陽花に隠れる様にして泣いている。子供の時から彼女が泣 のはここで、慰めるのは俺。
　素直な感情を発露出来ないこの幼なじみが、隣の辛抱強い愛情に気づくのはいつになることやら。

「夜の動物園」で登場人物が「くすぐる」、「魔法」

そこは魔法の場所だった。
父は動物園の猿の飼育員だった。類人猿は人を選ぶ。他の人では嫌がる猿が父には懐いていた。まるで魔法のように。
暗い中、鼻腔を獣の匂いがくすぐる。仕事終わり私は獣医として勤める動物園を後にする。
猿の飼育員の恋人と一緒に
今でもここは魔法の場所。

「早朝のカフェ」で登場人物が「溺れる」、「糸」

　カフェで朝食をとる。昼も夜もケータイに翻弄され、電波の渦に溺れそうになる中で、唯一落ち着いていられる場所。
「おはようございます」
　声をかけられる。 よく一緒になる笑顔の素敵な男性。
　連絡先を知りたいけどケータイをだすのが怖い。いっそ糸電話でも用意しようかしら、赤い糸の。

「昼のプラネタリウム」で登場人物が「嘘をつく」、「雲」

「今日、学校は？」
「休講」
　嘘をつく。自主休講だ。そう、と彼女は笑った。
　昼前の市営プラネタリウム。今日も僕しかいない。
「君は本当にここが好きね」
「ここなら雲一つない空で星が見られるから」
　嘘をつく。
「始めますね」
　彼女が言う。
　本当は君に会いに来てるんだ、なんて言えない

目の前には震える少年。
彼が盗った月のは写真集。懸想する入院中の少女に渡したいらしい。
深夜の本屋に盗みに入るなんて、僕ぐらいだと思っていた。理由も同じか。
店主が立替え、手伝いをしながら返済した。あの時の店主と同じ事を少年に告げる。
帰ったらあの少女、嫁さんに話そう。

「早朝の教室」で登場人物が「見上げる」、「猫」

「あきたー」
　机を揺らす。
「まだ十分しか経ってない」
　呆れたように笑うセンセイを見上げる。１９０㎝の長身、新卒、童顔、あと猫っ毛が可愛い。好き。
「放課後は部活だっていうから朝の補習にしてるんだ、さっさと解く」
　本当は朝だとセンセイ独り占めできるからだけど、まだ言わない。

「昼の浴室」で登場人物が「泣きじゃくる」、「メール」

　感情は少し遅れてやってくる。
　昨夜、恋人と別れた。最後のメールは「帰り気をつけて」だった。
　目が覚めてようやく事態を認識した。
　大きく息を吸い込み、お湯に潜る。
　もう一時間もこうしている。体がふやけてきた。別にこのまま浴槽に溶けてしまってもいいけど、私は決して溶けない。

「早朝の書店」で登場人物が「泣き出す」、「吐息」

はぁ、と熱の籠った吐息。涙で濡れた瞳で見つめられる。
胸に抱えた推理小説。
「切ないわ、恋が人を変えるのね」
それ、不倫相手を殺す話だったはずだが。
恋は確かに人を変える。
「いいから学校行けって」
立ち読みを嫌っていた俺が、彼女の店頭朝読書を許容するようになる程度には。

早朝の水族館」で登場人物が「すれ違う」、「瞳」

　ぱたん、とケータイを閉じた。メールはない。二週間ぐらい、恋人とちゃんと連絡が取れていない。休みも合わないし、すれ違ってばかりだ。
　落ち込んでいる場合でない。可愛い魚に餌をあげなきゃ。仕事ぐらいちゃんとしなくちゃ。
　水槽に映る瞳は泣きそうだけど、そんなの知らない。

「早朝のソファ」で登場人物が「貪る」、「半袖」

　半袖から伸びた腕が、だらりとソファーから落ちる。
　カーテンを開けると、朝陽が差し込んできて、彼は少し眩しそうな顔をした。
　私と同じ時間に起きて来て、わざわざここで惰眠を貪るのが彼の日課。訊いたら料理する音をそばで聞きたいと言われた。
　悪い気はしないので困ったものだ。

「昼の屋上」で登場人物が「さよならを言う」、「跡」

「バイバイ、先生」
彼女はそう言って制服のスカートを翻して立ち去った。
高校生の彼女が屋上で煙草を吸うのやめることも、同い年の子と付き合い出すのも良いことだ。
彼女の唯一の痕跡、残された煙草に火をつける。
あの子はこれの何処がよくて吸っていたのだろう。
煙が目にしみる。

「深夜のプラネタリウム」で登場人物が「すれ違う」、「雷」

夏期限定で営業時間を延ばすプラネタリウム、私の職場。おかげで交替制になり、上司と会う事が減った。
入れ違いにすれ違い。
だから客として寄った深夜のスタッフ室。
雷に打たれたような寝癖、私の好きな上司の彼。新入社員の女子の髪をそっと撫でた。
ああ、入れ違いにすれ違いばかり。

「朝の映画館」で登場人物が「噛み付く」、「足音」

すぐ始まる映画で選んだらホラーだった。なんで朝からこんなの。
本当は夕方に彼と恋愛物見に来る予定だったのに。
足音が近づいてくる。
私うるさい？　思ったら足音は隣に座った。
差し出されたハンカチ。
知らない男の人。
素直に受け取って顔に当てる。それに噛み付いて、泣き声を殺した。

「夕方の駅」で登場人物が「抱き合う」、「糸」

　電車が来るまで後十分。初デートはここまで上々。このまま帰るか。
　なんて思っていると、袖の釦が外れた。
「つける？針と糸ありますよ」
「あ、お願い」
　言って腕を差し出すと、彼女は僕の顔を覗き込み、
「ただこの裁縫セットと私は抱き合わせ販売です」
　微笑。
「夜はこれからですよ？」

「夕方の書店」で登場人物が「密会する」、「制服」

放課後の高校生が楽しそうに雑誌を見ている横を抜け、奥に向かう。
美術系の大きな画集を見ていた制服姿の彼女は、僕に気づくと少しだけ笑った。
本を置き、 その場を離れる。
僕はその本を開く。
白い封筒をそっと手に取った。遠回しで愚かな文通。
先生へ、と書かれた手紙をしまった。

「早朝の屋上」で登場人物が「ひっぱたく」、「鍵」

　ぱしん、と透き通った空に甲高い音が響く。右の頬が痛い。
　それでも頬を抑えたりせずに目の前の人物を睨みつける。
「諦めたら？無様ね」
　もう一度高い音がする。今度は左の頬が痛い。甘んじて受けよう。彼女は鍵を投げつけて立ち去る。彼の家の鍵。私が盗った。
　音楽教師の家の鍵。